

たまらなく会いたい

畠山妃美子

秋田県・三四・社会福祉法人職員

お元気ですか。

あなたが突然私の前から姿を消してから九年の月日が流れました。あの日、三月三日のひなまつりの日、いつものようにイベントにかこつけて二人で食事しましたね。

あなたと私は、何か行事があるたびに二人で出かけ一緒の時間を過ごしました。子供の日には遠くの海岸までドライブしましたね。途中の田舎道から幾つものこいのぼりを見たつけ。クリスマスは、私の部屋に小さなツリーを飾ってシャンパンで乾杯したつけ。いつもタイマー付きのカメラで二人の写真を撮って後でもう一度楽しんだね。三月三日もいつもと変わらず別れ、その日以来あなたからの連絡がなくなりました。

私は待った。ずっと待ってた。一カ月たち半年が過ぎ、住まいを変えても待ってた。故郷に戻った今では、あなたとの三年の日々が夢うつつとも思えます。でも手元に残った一五冊のアルバムは、あの日々が現実だったことを教えてくれます。

今、私はあの頃と同じく一人です。いつもあなたの助手席に座っていた私も、今ではハンドルを握り一人でドライブしています。

二人で見た風景はあまりに多く、あまりに強烈で、一人で訪れる気になれません。思い出は薄れることなく、時として香りさえ伴って私を襲ってきます。

きみまち阪へ二人で行こう、と誘ったのは私の方でしたね。きみこを待つ坂、君を待つ坂、つまり僕が坂なんだね、と言ったあなたは今どうしているのでしょうか。待っていたのは、あなたではなくこの私だったのに。

そんなことも知らず、今日もきみまち阪は米代川を見守り続けています。どこかであなたも私のことを見守ってくれているのでしょうか。

追伸

会いたい。たまらなく会いたい。